

特集

カイコの記憶



昭和初期の養蚕風景

最盛期には町内の約8割の世帯が育てていた蚕。少し前までは、近所のいたるところで、桑畑も見ることができました。

養蚕は、一昔前まで農家にとって貴重な現金収入源でした。養蚕を行っていた人たちは、土間はもちろん、居間、天井、あらゆる場所で蚕を飼育し、夜寝るときは蚕が葉を食べる音を聞きながら眠りました。

毛呂山町で一つの時代を築いた養蚕。しかし、今、養蚕農家の減少によって、過去のものとなりつつあります。

食欲旺盛な蚕のため、早朝から桑を摘み、深夜まで、没頭した桑くれ……。幼虫が繭を作りはじめようとするオコアゲのときは、一家総出で、ときには近所や親戚中が集まったこと……。

養蚕の記憶は、このまま消えていってしまうものなのでしょうか。

第一章 回顧

歴史を紐解く

毛呂山の養蚕の歩み

毛呂山町で養蚕をさかのぼると、江戸中期にわずかながら各村で春の養蚕がおこなわれていました。

明治期

明治時代に入ると、各村とも繭糸、生絹の生産を行うまでに春の養蚕は広まり、明治10年に温暖飼育法が創始されてから急速に普及しました。その後明治11年に秋蚕が公認されると年々改良進歩が行われるようになり、これとともに桑の品種改良も行われて、桑園が増加することになりました。そして明治45年ごろには養蚕農家戸数が町全体で約8割にまでなりました。また、生産した繭はそのまま売却されることはなく、大部分の農家は繭を加工し、生糸にしたり、機織をし、生絹としました。このころ、毛呂山町でも多数の機工場ができており、その数は50軒を超えるまでになりました。

大正期

大正期に入ると第一次世界大戦の影響で大正3年には、輸出の中心

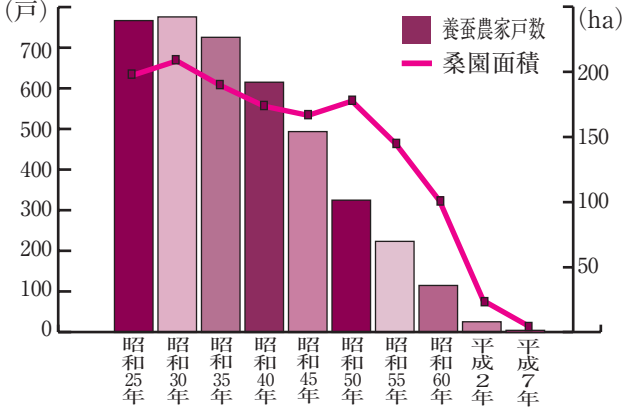
である生糸・繅糸の相場が下落し、繭の値段にも直接影響を及ぼしました。しかし、当時の一般農家は、既に現金収入を養蚕に頼っていたため、早急な蚕の品種改良が求められるようになり、国や県でも積極的に蚕種の改良を奨励していたため、蚕種業者も研究を重ねた結果、糸の質量ともに新品種が飼育され、普及、発展しました。また養蚕の発展にともない、蚕室や簇などの蚕具の改良が図られていきました。そして、大正15年の毛呂村では繭の生産額が米、麦の生産額の2倍になるほど、ますます収入源を養蚕に依存するようになりました。

昭和期以降

昭和に入るとまもなく世界的な金融恐慌により繭の価格が大幅に下落し、養蚕農家が困窮しました。また、第二次世界大戦などの影響により養蚕業は一時衰退しました。しかし、戦後になり、昭和24年に毛呂山養蚕農業協同組合、昭和37年に川角養蚕農業協同組合が設置されるなどして、養蚕は、次第に活気を取り戻していき、集団就職者も毛呂山町の工場に来るようになりました。また、

稚蚕協同飼育所が滝ノ入・平山・沢田に設置され、集団桑園、壮蚕用ハウスなどの施設が改善されたことにより、稚蚕期の作業が共同でおこなえるようになりました。しかし、昭和40年代も後半となると生糸の国内需要や輸出が減少し、中国や韓国から安い生糸が輸入されるようになり、小規模な養蚕農家は減少し始め、大規模におこなっていた養蚕農家も縮小化が進んでいきました。そして、昭和50年代も半ばとなると蚕を飼育する戸数が大幅に減少し、平成に入ると急激に衰退していきました。

毛呂山町における養蚕農家戸数と桑園面積の推移



資料：『農林業センサス』

毛呂山町の養蚕の歴史

年代	主なできごと
江戸時代中期	わずかながら各村で春の養蚕
明治時代	各村とも春の養蚕が普及
明治10年	温暖飼育法の創始
明治11年	秋の養蚕が公認となる
45年	養蚕農家戸数が、町域全体で約81%になる
大正時代	世界大戦の影響で主要農産物の価格が下落
大正15年頃	毛呂村では繭の生産額が米、麦の2倍になる
昭和時代	金融恐慌の際、繭の価格が大幅下落
昭和24年	（第2次大戦から終戦へ）毛呂山養蚕農業協同組合が設立
30年代	稚蚕協同飼育所が滝ノ入・平山・沢田に設置
37年	川角養蚕農業協同組合が設立
42年度から	稚蚕協同飼育所、集団桑園、壮蚕用ハウスなどの施設が改善
40年代後半	国内需要・輸出がともに減少
55年	中国・韓国から安い生糸が輸入
平成時代	岩井地区に稚蚕協同飼育所が完成
	養蚕農家戸数が大幅減少

（参考資料『毛呂山町史』）



▲ 昭和初期の養蚕風景



戦前まで、ほとんどの家が農業によって生計を立てていました。一般の農家にとつて、養蚕は現金を得るための大切な手段。多くの農家では、家屋の一角に蚕のための部屋があり、文字通り蚕とともに生活していました。

金融恐慌や戦争による繭の価格の暴落にも耐え、戦後、明治以来の最盛期を迎えた毛呂山の養蚕。その第一線で活躍した人びとの記憶。

それは、毛呂山の養蚕を語るのに欠かせない貴重な生きた証です。

第二章 懐古

〈時代を語る〉



元 養蚕農家
秋山博昭さん（大師一区）

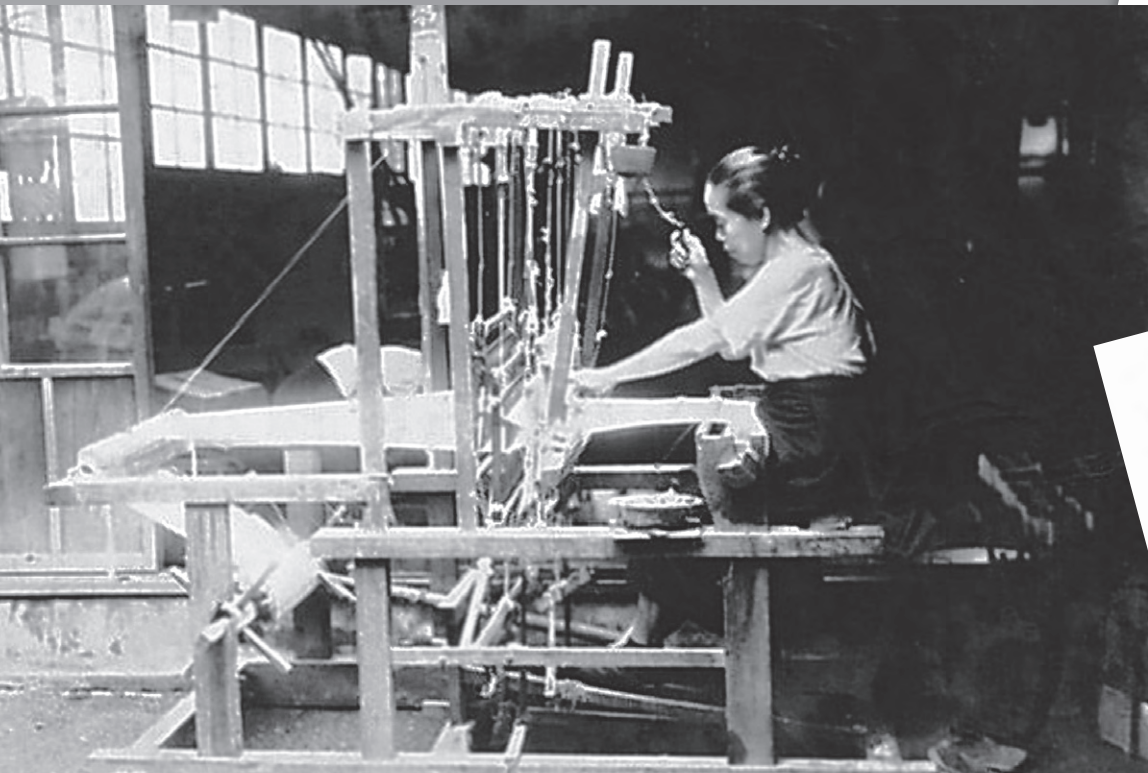
一日中、蚕に囲まれた暮らし。
いい繭をとることが
一番の楽しみでした

もう養蚕をやめてから、およそ10年ぐらいいなりますが、一番の最盛期にはおよそ400貫（約1500キログラム）の繭を出荷していました。毛呂山町では多いほうだったと思います。当時は、鉄骨やアルミのハウス、2棟の物置だけでなく家のなかまで蚕を飼っていました。

私の家は、父親が養蚕をおこなっていたため、私も幼少のころから蚕に囲まれた暮らしをしていました。5月から9月の養蚕の時期には、朝も4時ごろから桑を取りに出かけ、一日中蚕の世話をおこない、夕飯を食べるのも夜の8時。毎日その繰り返しでも忙しかったことを覚えています。とにかく夢中になってたくさん繭をとっていました。そのころはいい繭をたくさんとることが一番の楽しみでした。

私はおおよそ10年ぐらいい毛呂山町養蚕農業協同組合長をさせていただきました。そのときは少しでも多く繭をとらなくてはならないという責任を感じていましたが、同時にその分やりがいを感じて養蚕をさせていただきました。

今、振り返ると、養蚕をしていたころの生活は、私の生涯のなかでも大切な一ページを飾ってくれたと思います。生涯忘れることのない時でした。



▲ 機織りの様子（昭和15年ごろ）



（組合事務所）

古い歴史と優秀な環境をもつ

越生織物商工業協同組合傘下

職場への手引

生織物商工業協同組合

埼玉県入郡郡越生町717
電話 越生 14 番
所沢 公共職業安定所（越生の担当）
電話 越生 2 番



▲ 職安依頼の
集団就職募集の
パンフレット
（昭和29年）

買い付けた生糸を絹織物に 遠くは鹿児島から集団就職で毛呂山へ

私の家は、大正中期のころから昭和末期まで機屋を営んでいました。当時は、飯能・越生・小川の裏絹といったら有名で、越生、毛呂山、坂戸の入西には比較的大きな織物工場が数件ありました。昭和28年には、近くは越生町の梅園、遠くは鹿児島県から働き手が来ていて、およそ10人くらいの人を雇っていました。当時、遠くは茨城県古河市や群馬県渋川市にある糸屋から糸を買い付けて、織り上がった絹織物を主に越生町に卸しに行くのが私の仕事でした。

私も忙しく仕事をさせていただけでしたが、特に女性が忙しかつたようです。毎日、機を織るために工場に行ったり、雇っている人のまかないを作るために炊事場に行ったりとその往復で一日が過ぎてしま

元 **きぬおりもの
絹織物工場経営**
田島政治さん（毛呂本郷）



生活で、休む間もなかったように記憶しています。

また、先進的な工場に見学に行くことがあり、京都府にある丹後ちりめんの工場などの見学に行きました。少しでも効率よく生産するために熱心に勉強しました。

織物工場をして、人を雇っていましたが、実際のところ生活に関しては、楽な時期はあまり長くなかったように記憶しています。



▲ 生糸（かつて田島さんの絹織物工場に使われたもの）

根っから蚕が好きなのでしょね

第三章 蚕 文化を守る

毛呂山町の「地域文化」とも言える養蚕ようさんを今でも続けている2軒の養蚕農家の人たちは、貴重な地域文化の守り手として、こんにちも蚕の飼育に精を出しています。

養蚕農家

野原道子さん（大 類）



私は、この家に嫁ぐ前から養蚕をしていました。実家も養蚕をおこなっていたので、今でも養蚕をしていることが当たり前のようになっています。私の住む地区は、もとより養蚕が盛んであったため、これまで一生懸命になって蚕を育ててきました。今まで養蚕をしてきて辛いと思ったことは一度もありません。

蚕の飼育は手間のかかる仕事ですが、手間をかけたぶん応えてくれる。蚕を育てるのは赤ちゃんを育てるのと似ている気がします。一生懸命に桑をあげ、手塩にかけて育てるといい糸がとれ、重みのある、しっかりとした大きな繭を作ってくれたときは、本当に嬉しく思います。私は、根っから蚕が好きなのでしょね。

今となっては、着物を着る人が減り、絹があまり売れなくなっただけで、養蚕をする農家が全国的にもずいぶん減ってしまいました。とても寂しいことだと思います。しかし私は、蚕が好きですから、これからも体が元気なうちは養蚕を育て続けていきたいと思っています。

養蚕の手順

掃立て

蚕の卵をあらかじめ産みつけた「蚕種紙」を種屋などから購入し、種紙や種箱に入っている孵化したばかりの蚕（毛蚕）を羽ぼうきで掃き下ろすことを「掃立て」といい、蚕の飼育はここから始まります。

桑こしらえ

毛蚕を掃き下ろしたら桑を与えて飼育用のタナに給桑用のカゴのままさしておきます。その後、桑を1日5回程程度、早朝から夜10時ごろまでの間に与えます。

蚕が小さいうちは「稚蚕飼育」といって、細かく刻んだ桑を与えます。桑は桑畑から摘んでできます。**桑くれと棚飼**

養蚕で最も神経を使うのは室温を保つことです。そのために火鉢をタナ（蚕棚）の側に置き、温度計を見ながら、常に一定の温度を保つようにします。

蚕は桑しか食べませんので、桑を1日5回程程度、朝から夜中まで桑摘みをしては桑くれをおこないます。蚕をカゴにのせ、これを座敷や土間などに設置した蚕棚にさし、収納する飼育方を棚飼とい

上簇

蚕は眠起といつて脱皮を繰り返します。掃立て後5・6日くらいで初眠（齢）をし、その後二眠、三眠、四眠と繰り返すので、その度に体も大きくなります。四眠が終われば、しばらくすると桑を食べなくなり、体が透き通ってきます。蚕は、孵化してから1カ月ほどでこのような状態になります。これは蚕が繭を作ろうとしているので、木鉢（蚕鉢）で蚕を拾い、繭を作らせるために簇に蚕を置いて、繭を作る巣にします。これを「オコアゲ（上簇）」といいます。

繭かき・収繭

上簇後、一週間ぐらいで蚕は繭をつくり、サナギになります。このころをみはからって簇から繭をはずす作業をします。これを繭かきといいます。回転簇の繭かきには繭かき棒という道具を使います。はずされた繭は、上繭・玉繭・屑繭に選別されます。玉繭とは二匹の蚕が一つの繭に入った繭のことです。出荷することができるのは上繭で、上繭はケバトリキで毛羽を取ったのち、繭袋などにに入れて出荷します。

養蚕農家

西山 茂さん
てるさん (大 類)



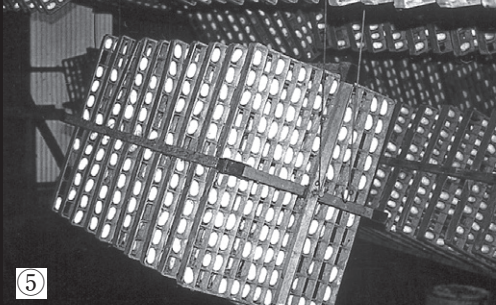
桑の葉を食べる音を
聞いたり、蚕の顔を見るだけで疲れも忘れます

私たちの家では昭和30年ごろから養蚕ようさんをおこなっています。今となっては飼育する蚕の数が減っていますが、昔は家のなかで部屋のなかに条桑台じょうそうだいを置いて、ところ狭しといっぱい飼っていました。食事も蚕を見ながらでしたし、まさに生活を共にしていた感じですよ。ですから今でも蚕には愛着があります。桑の葉を食べている音を聞いたり、蚕の顔を見たりするだけで疲れも忘れます。

蚕の飼育は、良質の桑生産から温度管理など細かなことに気をつかいながらの作業があり、とても大変な作業が多いのが事実です。しかし、蚕は、桑をあげると目に見えて大きくなる様子がわかりやすくし、とても忙しい仕事ですが、やりがいを感じながらできる仕事であるともいえます。昔は、家だとれた繭まゆを品評会に出し、表彰されたこともあります。

今は、後継者不足などで養蚕農家が減ってきていますが、国産の生糸はとても良質のものであるため、決してこの文化が廃たれることはないと思っています。

蚕を育てる作業は大変ですが、これからも二人で協力して、よりよい繭を生産していきたいと思っています。



- ①飼育小屋の内部
- ②上簇じょうぞく (蚕を網のままとる)
- ③上簇まぶし (簇に蚕を乗せる)
- ④簇しゅうけんに散らばっていく蚕
- ⑤収繭 (回転簇)
- ⑥収繭 (繭の毛羽取り)
- ⑦収繭 (蚕棚にさしておく)

写真協力/小室正夫さん (平成7年)

第四章 紡ぐ 文化を後世に

地域文化は教材でもある

私は、現在小学4年生の担任をしています。今年の9月20日に社会科見学で子どもたちと一緒に歴史民俗資料館に行きました。テーマは「過去100年さかのぼって、昔の生活を知る」ということで歴史民俗資料館にある様々な展示物を見学するだけでなく、石臼を挽いたり、昔の洗濯板を使用してハンカチを洗ったりと様々な体験もできました。子どもたちにも「たいへんだけど、面白い」など

と非常に好評でした。やはり子どもたちには、実際に体験したものが印象に残りやすく、社会科見学が終わった後に絵を描いてもらったのですが、体験したものの絵が多かったことが印象的でした。

また、川角小学校では以前に学校で蚕を飼っていたことがあり、そのことを子どもたちに話すと「虫を飼っていたの?」とか「虫から服を作ったの?」など様々な反応がありました。今の子どもたちには、生き物から服を作るという感覚があまりないらしく、興味を示したことに驚きがあり、機会があればこのような地域文化を体験させてあげたいと思いました。



都築淳郎さん (川角小学校教諭)

地域で文化を守っていくのは並大抵のことではないと思います。そのなかで、私たちができるのは、地域の文化を子どもたちに教えていくことです。地域の文化を学ぶことで、地域を誇りに思う心を養い、それぞれの子どもが成長し、そして、一人ひとりの子どもが各々の自己を確立していく。そのための手助けをしていきたいと考えています。

文化は体験すること で後世へ伝える

今年の7月に学芸員実習で毛呂山町歴史民俗資料館にお世話になり、蚕の飼育についての企画展示をおこないました。

歴史民俗資料館の資料や収蔵品を調べているなかで毛呂山町では、以前養蚕が盛んにおこなわれていたことを知り、毛呂山町の人たちに養蚕の歴史や文化についてもっと知ってもらいたいと思い、養蚕のことを企画展示にしようと考えました。また、私の母の実家では昔、養蚕をおこなっており、私も子どものころ蚕を育てた経験があったため養蚕に興味があったこと。最近、近所に桑畑が減ってしまったことに対しての危惧があったことも養蚕を取り上げる理由になりました。中学生のころは通学路にも桑畑があり、よく眺めながら帰宅した思い出があります。

実習では、想像だけでは物の本質は分からないということ学びました。当初蚕具について、それ



平山美由紀さん (大学生・鶴ヶ島市)

ほど大きくないものを想像していましたが、実際に見てみるとその大きさに驚かされたことがありました。何事も自分の目で見てみないことには分からないことが多いということを痛感しました。

養蚕だけでなく地域の文化などについても同様であると思います。実際に体験して、体験することを通して文化を後世に伝えていくために一番大切なことだと思います。現在私は大学で考古学を学んでいますが、考古学も同様で文献などを読むだけでは分からないことがたくさんあります。実際に自分の目で見て発見することも多いのです。私は、今回の実習で学んだ多くのことを今後の人生に活かしていきたいと考えています。

毛呂山町で一つの時代を築いてきた養蚕。

時代が進むにつれ、養蚕を行う農家も減少し、今となっては、養蚕農家も2軒となってしまいました。時代の流れによって、これまで行われてきたものが減っていくことは仕方のないことかもしれません。けれども養蚕が行われていた事実は、決して消えることはありません。

今もなお、この文化を守っている人がいます。文化を後世に伝えていこうとしている人がいます。歴史民俗資料館においても常設展示で養蚕に関するコーナーを設置し、文化を後世に伝えるための展示をしています。

文化を受け継いでいくことは、たいへん難しいことです。しかし、こうして人びとが語り継ぐことによって、決して忘れられないものへと変わっていきます。

「カイコの記憶」は、私たちの町に深く根付いた地域の記憶です。道端に桑畑を見かけたら思い出し出してください。私たちの町でも養蚕が盛んに行われていたことを――。

最後になりますが、今回の特集をとおして、取材に応じてくださった皆さん、貴重な資料を快く提供してくださった皆さんに心より感謝を申し上げます。

【参考】『毛呂山町史』、『常設展示解説図録』毛呂山町歴史民俗資料館、『毛呂山町・越生町の絹織物工場の今昔』岡野恵二氏
【資料提供】田島政治さん、野原道子さん、小室正夫さん、栗原大次郎さん

特集 カイコの記憶 完